

秋というのは、上に色々な言葉がつく季節です。芸術の秋・スポーツの秋・読書の秋とあり、どれをとっても素晴らしい秋ですが、何と云っても素晴らしいのは、収穫の秋・みのりの秋です。豊かな恵みを刈り取る…これも秋であります。収穫感謝の意味は、恵みを私たちに与えてくださる神さまに感謝を捧げるのが一番の目的です。日本にも収穫感謝に似た「勤労感謝の日」という祝日がありますが、誰に何を感謝するのか非常に曖昧です。これは日本人の宗教観の表れです。たとえば、七五三でお宮参りをして、教会で結婚式をして、お葬式はお寺で行う…お宮・教会・お寺。これで何の違和感を持たないのが、日本人の曖昧な宗教観を表しているのです。しかし、私たちは天地の創造主であり、恵みをいっぱい与えてくださる天の父なる神さまに感謝することを覚えて心から感謝をしたいものです。聖書の中に神さまに対する捧げものの記事があります。カインとアベルの捧げものの話です。カインは、地から採れた作物を神さまの前に持ってきました。アベルは初子の羊、その年に生まれたばかりの子羊を捧げました。この2人の捧げものを考えてもこの世の人々の宗教観の表れがあります。カインの捧げものは人間の感情から考えられる「宗教的」な捧げもので、アベルの捧げものは神の定めによる「信仰的」な捧げものです。私たちは、アベルのような神さまが喜ばれる信仰的な生活をしなければなりません。それでは、なぜアベルの捧げものは喜ばれ、カインの捧げものは拒まれたのでしょうか？それには深い意味があります。(ヘブル11:4)アベルの捧げものがなぜ神さまに受け入れられたのか、ここから読みとることができます。アベルは「いけにえ」として羊の初子を捧げたとあります。「いけにえ」とは動物をほふって血を流して神さまの前に捧げるという意味です。聖書には「全てのものは、血によって清められる(ヘブル9:22)」とあります。アベルの捧げたものは、神さまの御心にかかった捧げものであったといえます。人間が罪を犯したなら、本当は自らの血を流して罪を清めなければいけないのを、かわりに動物を殺して血を流し、その血を通してその人の罪を赦すというのが、やがてイスラエルの律法の中心となる「血による罪の清めと赦し」となるのです。この時から未来には、神の子羊であるメシア、イエスキリストが十字架で血を流されることによって私たちの罪が赦されるという事、そこで神さまのご計画が成就するのです。旧約の時代には動物の血が流され続けて彼らに赦しが与えられてきましたが、それは、イエスキリストが私たちの罪を清めるために十字架で血を流されることを示すところにすぎなかったと言うことです。その一番最初の事柄が、すでにエデンの園で行われているのです。アダムとエバは食べてはいけない知恵の実を食べてしまいました。すると突然目が開かれ、自分たちが裸であることを知ってイチジクの葉をつづり合わせて体を覆ったとあります。しかし、神さまは彼らに皮衣を与えられました。イチジクの葉をつづり合わせたものは、人間がつくった人間の力による人間を隠すための覆いでしたが、神さまにはそのようなものは通用しません。神さまは皮衣をお与えになったのです。皮衣を与えるということは、動物の血が流された、動物が犠牲になっているのです。その結果彼らに皮衣が与えられた、罪が赦されたということでした。人間が罪を犯したその時からすでに血を流すことによって罪を赦される定めが決められていたことが分かります。このようなことから、神さまがアベルの捧げものを受け入れられた意味が分かります。私たちは、このことを通して神さまが私たちのために多くの恵みを与えてくださったこと、その一番大きな恵み、神の御子イエスキリストを遣わしてくださったこと・私たちのために十字架で犠牲にされたことに心から感謝するのです。『このからだを神に受け入れられる聖い生きた供え物として捧げる』(ローマ12:1)ことをしなければいけません。私たちは、この収穫感謝の時にあらためて私たち自身を捧げることをしたいと思います。また、聖書では、私たちクリスチャンは「三流のクリスチャンになれ」とあります。ランクづけの三流ではなく、文字通り三つの流れを作るということです。(士師12:5~7)では、「シボレテ」「スイボレテ」の発音の違いによってエフライム人を判別したことが記されています。この「シボレテ」とは、「流れ」と言う意味です。「スイボレテ」は、「重荷」という意味です。「流れ」と「重荷」では、ずいぶん意味が違います。名前ばかりのクリスチャンは「重荷」になっています。聖書を読まなければならない・教会に行かなければならない・祈らなければならぬ…~しなければならぬになってしまっているのです。私たちは、そうではないはずで、喜んで、毎週日曜日が待ち遠しい思いで教会に集っているはずで、私たちは、神さまに喜ばれる「重荷」ではなく、神さまの恵みが「流れる」クリスチャンでありたいです。エデンの園にも四つの流れがありました。(創世2:10~14)ピション(流れ出るの意味)、ギホン(溢れるの意味)、ティグリス(急な流れの意味)、ユーフラテス(甘美の意味)という四つの流れです。これらは精霊さまの性質を表すものです。豊かな精霊さまに潤されるクリスチャンの姿を表しています。また、(エゼ47:9)では、この川が入る所では、全てが生きています。リバイバルがおこるのです。私たちが行く所で、罪に死んだ人々が生き返る…こういう流れのあるクリスチャンを神さまは求められているのです。(ヨハ7:38)では、『心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる』とあります。また、(黙示22:1~2)では、『都の大通りを流れていた』というように、聖書は「流れる」ということに一貫しているのです。私たちも流れのあるクリスチャンであるべきです。三つ流れの1つは「汗」を流すクリスチャンです。神様のために働く時には汗を流します。ルツは朝から晩まで落ち穂を拾っていると囃らずもボアズの畑に導かれた、とあります。人間の考えでは囃らずも神さまがルツを導いておられたのです。やがてルツはボアズと結婚し、その子孫がダビデでありイエスキリストであるのです。汗を流すということは祝福の源なのです。私たちは、神さまの働きを行うのに汗を流すことをいとってはいいけません。次に「涙」を流すクリスチャンです。(詩編126:5~6)涙とともに種を蒔くものは、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰ってくる。とあります。福音を述べ伝えることは素晴らしいことです。ただ、それだけではいけません。植えられた種はそのままでは発芽しません。水分が必要なのです。それと同じように福音の種をとりなしの祈り、涙をもった祈りによって蒔いた種が芽を出して新たなクリスチャンが生まれるのです。3つ目は「恵み」を流すクリスチャンです。私たちは神さまからたくさんの恵みを受けています。それを独り占めしてはいけません。パレスチナには大きな湖があります。1つはガリラヤ湖、もう1つは死海です。ガリラヤ湖は山の麓から流れた水が注いだ湖で、ガリラヤ湖からさらにヨルダン川を経て死海へと注ぎます。このガリラヤ湖は、恵み豊かな世界屈指の漁場です。しかし死海は、ヨルダン川を経てうけた水を流す所がありません。する生き物のいない死んだ湖になってしまいました。ですから、神さまから恵みを多く受けておきながら、それを人々に流さなければ、受けた恵みも死んでしまいます。受けた恵みをドンドン流していけば、また新しい恵みを神さまは豊かに与えてくださいます。この三流のクリスチャンになるために、まず、私たち自身を神さまに捧げていきましょう。(ローマ12:1)に「生きた供え物」とありますが、原語では「丸ごとの供え物」という意味です。一部分ではなく、私たちの考え・言葉・行動全てを神さまに捧げる礼拝を行いましょ。